

ナイジェリアで考え直した、アイデンティティ

My identity in Nigeria as a mixed Nigerian and Japanese

齊藤 オヌ 花ジェニファーイフォナイア

Saito Onu Hana Jennifer Ifunanya

はじめに

みなさん、こんにちは。私は齊藤オヌ 花ジェニファーイフォナイアといいます。ナイジェリア人の父と日本人の母の間に生まれ、現在は東京都の大学3年生です。

私は生まれてからのほとんどを母の国、日本で過ごしました、小中高ともに日本、家で話す言葉も日本語が多いです。そんななか、昨年(2021年)10月、21歳の私は10年ぶりに父と共にナイジェリア連邦共和国を訪れることになりました。私は今までアフリカと日本にルーツを持っていること」という自分の「アイデンティティ」(=自分とは誰か、ということ)について長く考え続けてきました。2020年にはアメリカを中心に活発化した Black Lives Matter 運動(黒人や少数派の権利を守ろうとする運動)にも影響され、「黒人女性」という自身のアイデンティティも深く考えるようになりました。ナイジェリアに滞在した3か月間の経験から、自分のアイデンティティについて、たくさんの方のことを考えたのでお伝えしたいと思います。

着陸

2021年10月7日、私はナイジェリア最大の都市ラゴスにあるムルタラ・ムハンマド国際空港に降り立ちました。そして次の日にはバスが発発して空港から家族の住むアナブラ州オカまで約11時間のドライブが始まります。

久々のナイジェリアの光景は日本とはまったく異なっていました。車内では大音量の音楽が流れていて、窓の外を見ると赤土がかすかに舞い上がるなか、縦横無尽に人々が歩いています。道では車の隙間を縫うように若い男の子たちがカートを押していて、ラパ(アフリカ布)を巻いた女性たちが食べ物売ったりしています。蛍光色のサッカーチームのTシャツや伝統的な柄の服がそこかしこでカラフルに動いていて、見ただけでワクワクするような光景が広がっているのです。

一度、渋滞にはまって何十分もバスが止まることがあ

りました。待っていると頭に大きなバスケットを乗せた男性が窓の近くに寄ってきて自分の商品を買わないかとアピールし始めるのです。ついに父が根負けして、その男性から袋に大量に入った Gala(薄い生地に乾燥肉が入ったお菓子)を買いとると、私に手渡してきます。10年ぶりのナイジェリア帰省はこうして幕を開けました。

言葉

ナイジェリアには500を超える多様な民族が住んでいますが、私の父はナイジェリアの南東部に多いイボ(Igbo)出身で、私も3か月間父の故郷のアナブラ州に住み、大学に通っていました。久々のナイジェリアへの帰省、最初はとても緊張していました。11歳で訪れた際は1年ほど滞在し親戚に親切にしてもらいましたが、大きくなった今、以前のように打ち解けられるかとても不安だったのです。しかし、それは杞憂(きゆう)に終わりました。親戚は私の帰省をとても喜んでくれ、そして友人や通りすがりの知らないおじいさんまで、だれもが私を温かく歓迎してくれました。

住んでいた場所ではみんな英語に加えイボ語を話します。私はイボ語は少ししかわかりませんが、学校や公の場では英語で話している人も、親しい間柄や家族の中だとイボ語に切り替わるので、最初の頃はどうか話についていこうと悪戦苦闘しました。同年代の友人たちがさっきまで簡単な英語でしゃべっていたのに、肝心なゴシップや冗談になるとイボ語に切り替わり、みんなが大爆笑している中分らずじまい…ということもしばしば。家族には「あなたはイボ人なんだからイボ語を話せるようにならなきゃダメよ」とよくからかわれました。

私は日本に20年以上住んできましたが、いつも自分がナイジェリア人であることを意識しているつもりでした。しかし実際にナイジェリアにいと文化も言葉も知らないことばかり。周りからも「外国人」と思われることが多かったです。

また思いがけず、自身の容姿もまた私をナイジェリ

さいとう おぬ はな じえにふあー いふおないあ: 2000年生まれ、茨城県出身。ナイジェリア人の父と日本人の母の間に生まれる。東京大学法学部3年生、政治学を勉強。AJFのアフリカユースミートアップ (AYM) 運営メンバー。日本に住むブラックルーツを持つ若者について勉強を続けており、2020年8月にはメディアサイト Voice of Youth Japan にブラックルーツを持つ若者と Black Lives Matter 運動のつながりについて記事を掲載。https://voiceofyouth.jp/archives/3003

アの中で「外国人」にしていました。

ナイジェリアでのアイデンティティ 黒人？白人？

日本にいるときは、自分は「黒人女性」だと思っていました。他の日本人に比べて肌の色も黒く、髪質もカーリーだったため、他の人も私が黒人であることに疑問はなかったでしょう。

しかし、ナイジェリアのマーケットやレストランに居ると知らない人から「オニョオチャ」や「オイボ」と呼ばれることがありました。これはイボ語で「白人女性」や「外国人」を意味する言葉です。確かにナイジェリアの多くの人に比べれば私は肌の色も白く、髪のカールも弱いですが、驚くことにナイジェリアで出会った一部の人は私のことを、西欧的な白い肌を持つ人と同じように捉えていたのです。

これは日本にいたときとは真逆の捉えられ方でした。また、日本にいるときと違っていたのは、ナイジェリアでは私の肌の色がしばしば理想的だと捉えられていたことです。ナイジェリアにいると、私の肌の色が fare (白に近い明るい色) であることをよくほめられました。白人っぽい (本当はアジアですが) ことがしゃられていて、お金持ちで、モダンな雰囲気を与えるようで、初めてあった人にオニョオチャや fare であることと結びつけて容姿をほめられることがしばしばありました。これには驚くと同時に居心地が悪い思いをしました。なぜかという、そこに「肌が白いこと=美しいこと」という一つの価値観が見受けられたからです。

ナイジェリアのスーパーマーケットに行くと美容コーナーには必ず「肌を白くする」商品が売っています。それは肌の漂白剤や化粧水、石鹸であったりします。Whitening (ホワイトニング) と呼ばれるこのような商品は危険な成分が入っていることも多く、時に病気に至るほど大きな健康被害を与えかねないのですが、肌が白い方が良い仕事や良い人脈を持つと考える人たちが使い続けるため、アフリカでは深刻な社会問題になっています¹⁾。「肌が白いこと=美しいこと」



写真左：スーパーマーケットに並ぶ美白商品／写真右：筆者(右端)といとこたち 2021年11月 ナイジェリア・アナンブラ州

という価値観は多くの人が黒い肌をもつナイジェリアでも頻繁に見られていたのです。容姿をほめられるたびに、このような商品と無縁でいられる自分の特権性 (=人より有利な立場にいること) を思い知らされるような気がしました。

このような称賛が嫌だったもう一つの理由は、「肌が白いこと=美しいこと」という価値観こそ、日本では自分が苦しみめられた考え方だからです。日本の化粧品店では「美白」という言葉がよく使われたり、白い肌を持つモデルが取り上げられることが多いですよね。それぞれの肌の色、人種、文化にそれぞれの美しさがあるはずだと私は思いますが、白い肌を美しさの頂点とする価値観はそれ以外の美しさを時に排除してしまいます。特にアフリカルーツを持つ人たち、肌が黒い人たちの美しさは忘れられがちです。日本で暮らしていた20年間、嫌だなあ、と思っていた価値観が、ナイジェリアでは逆転して自分に当てはまるようになってしまったのです。

文化や言語をまだまだ知らず外国人だと思われること、そして何気なく言われる「オニョオチャ」という言葉から発せられる「あなたには肌が白いという特権性があるよ」というメッセージ、ナイジェリアで体験したこれらのことは自分のアイデンティティについての考えを大きく揺さぶりました。

結びに

ナイジェリアでさまざまな人々、出来事、文化の違い、価値観に出会えたことで私の探求はさらに前進しました。そして想像していなかったような反応をうけて新たな気づきを得ることもできました。これからも「アフリカルーツと日本のルーツを持つこと」そして「黒人女性であること」というアイデンティティについて考え続けていきたいと思います。

(1) AFPBB News『危険と隣り合わせの美白、アフリカで広がる漂白クリーム』2018年9月2日 (最終閲覧日：2022年2月6日) <https://www.afpbb.com/articles/-/3186691>

